

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32630

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18479

研究課題名(和文)終戦までのハンセン病患者の「臣民」化における短歌と医療の関係をめぐって

研究課題名(英文)How Japanese lepers become subjects through medicalization and Tanka by the end of WWII.

研究代表者

松岡 秀明(Matsuoka, Hideaki)

成城大学・共通教育研究センター・非常勤講師

研究者番号：80364892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は以下の3点を明らかにした。(1) 1924年に、九州療養所で患者たちが集う場として定期的に開催した歌会が各地のらい療養所に広まった。(2) 九州療養所の患者たちの句歌集が1926年に出版され、患者たちの短歌が療養所の外でも読むことができるようになった。1939年に長島愛生園の明石海人の『白描』がベストセラーとなり、「癩短歌」ブームは頂点を迎えた。(3) 救癩活動を行なった貞明皇太后は、1932年に人々に患者たちを手助けするように促す意味の歌を詠んだ。この「み恵」に対して、患者たちは貞明皇太后に対する感謝を歌で表現した。これらの相互行為により、ハンセン病患者たちは「臣民」となり得たのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は第二次世界大戦の終戦までの日本で、ハンセン病と社会さらには天皇制国家との関係において短歌が重要な意味を持っていった過程を明らかにしたが、これは先行研究では検討されておらず学術的な意義を有する。具体的には、短歌をとおして、らい療養所の患者たちは療養所の外の人々となることが可能となった。他方、療養所の外の人々-そのなかには皇族や歌壇および文壇の人々も含まれる-は、短歌をとおして患者たちにメッセージを送ることができた。短歌は療養施設の内と外との一方通行的ではなく双方向的コミュニケーションを成立させる文芸の様式となったのである。

研究成果の概要(英文)：This study revealed the followings three facts. (1) Tanka gathering started to be held periodically at Kyusyu Ryoyousho, a public leprosarium, in 1924 and it spread to other public and private leprosaria in Japan. (2) In 1926, the patients of Kyusyu Ryoyousho published a Tanka and Haiku compilation and it got the readers outside the leprosarium. The Lepra Tanka boom reached its peak when Akashi Kaijin (a patient of Nagashima Aiseien, a national leprosarium in Okayama) became a bestseller in 1939. (3) In 1932, the Queen Mother Teimei made a Tankia which encouraged people to help lepers in public Tanka gathering. Lepra patients expressed their gratitude to her by Tanka. Through these reciprocal transaction, outcasted lepers could become the subjects of Japan.

研究分野：文化人類学

キーワード：ハンセン病 短歌 臣民 ナラティブ 病いの語り

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### この研究構想に至った背景と経緯

本研究の端緒は、2013年に開催された日本保健医療社会学会第39回大会において、研究分担者の池田光穂が主催し、筆者すなわち研究代表者の松岡秀明が発表者の一人として参加したラウンドテーブル・ディスカッション「病の語り：哲学と人類学・社会学の架け橋」に遡る。松岡はハンセン病の歌人明石海人について「国家、癩、短歌：明石海人の短歌をめぐって」というタイトルで発表を行なった。そこで、他の参加者の発表と全体での論議から多くの刺激を受け、病いの経験がどのように語られ、社会的にどのような意味を持ち、医療は病いのナラティブに対してどのようにかわるかについて関心を深めた。そして、第二次世界大戦の終戦までにブームとなったハンセン病短歌を社会的コンテクストのなかで検討するという研究の構想にいたった。

### 2. 研究の目的

第二次世界大戦の終戦までの日本において、ハンセン病と短歌は重要な関係を持っていた。具体例を以下に示す。(i)短歌は、「絶対隔離」という状況のなかで、ハンセン病患者たちが療養所の外部とつながる可能性を持った表現様式であった。(ii)大正天皇妃である貞明皇后が、1932年に大宮御所の歌会で「癩患者を慰めて」と題して「つれづれの友となりても慰めよ行くことかたきわれにかはりて」と詠んで以来、天皇制とハンセン病の関係のなかで短歌は大きな役割をはたした。(iii)ハンセン病をテーマとして1940年に公開された商業映画<小島の春>のなかで、ハンセン病療養所の医師小川正子(この映画は、1938年に出版され小川の歌文集『小島の春』を脚色したもの)やハンセン病歌人明石海人の短歌が効果的に用いられた。

短歌は、療養所のなかのハンセン病患者と療養所の外の人々 - そのなかには皇族や歌壇および文壇の人々も含まれる - との間、一方通行的ではなく双方向的コミュニケーションを成立させる文芸の様式であった。同時に、「癩短歌」というジャンルが成立することによって、ハンセン病患者たちの表現はそのなかに困りこまれていった。この現象は、ハンセン病患者の絶対隔離という当時の国家政策のもとに生じ、そこには当事者であるハンセン病患者だけでなく、ハンセン病療養所の医師、歌人、作家、さらには貞明皇后がかかわっていた。すなわち、第二次世界大戦終戦までの日本においては、ハンセン病と社会さらには国家との関係において短歌は重要な意味を持っていた。しかし、ハンセン病、短歌、国家という観点からの研究はこれまでほとんど行なわれてこなかった。

そこで、ハンセン病、短歌、国家を視野に入れた研究を設定することができる。このような研究は大内(2008)や荒井(2011)が部分的に行なっているものの、これまで十全には行なわれていない。慢性病を患う人々がその病いに対する社会のまなざしをどのように内在化し、そしていかに自らを表現するかについての研究の蓄積がある文化人類学の一分野である医療人類学の観点から、このテーマにアプローチする。

本研究は、日本で最初にハンセン病療養施設がつくられた1889年から1945年の終戦までの期間で、ハンセン病療養所における短歌を、療養施設という閉鎖された空間と外部との双方向的なコミュニケーションを可能とした表現様式として捉え、医療人類学と文学研究

を架橋するアプローチによって以下3点の課題を明らかにしようとする。

- (1) ハンセン病療養施設で患者たちはいつから、なぜ短歌を詠むようになったのか。
- (2) 患者たちの短歌は療養施設の外でどのように受け入れられたか。そしてそれは、当時の状況とどのような関係性を有するか。
- (3) 医療は、短歌によってどのように天皇制とハンセン病を媒介し、ハンセン病患者たちを「臣民」としたか。

#### 引用文献

荒井裕樹(2011)『隔離の文学—ハンセン病療養所の自己表現史』書肆アルス

大内郁(2008)「戦中期の『皇恩』とハンセン病者の文芸 序説」三宅晶子編『身体・文化・政治』(人文社会研究科研究プロジェクト報告書第156集)千葉大学大学院人文社会研究科、pp. 63-73

### 3. 研究の方法

以下の方法で本研究を行なった。病い(特に慢性病)の文芸的な表現とその社会性について研究した文献の収集および検討、ハンセン病患者の短歌とその受容についての文献の収集とその分析、ハンセン病短歌についてのそこにしかない資料を保有し、また当時を知る患者たちが生活する三つのハンセン病療養施設におけるフィールドワークによるデータ収集、それら営為によって得られたデータの分析、論文や学会発表による成果の発表に対する視聴者や読者の批判の検討

### 4. 研究成果

これまでに学会での口頭発表と論文等の活字媒体での発表で、「2. 研究の目的」で述べた三つの問いに対する答えを明らかにしてきた。(1)については、患者たちが詠んだ短歌をまとめた形で活字化するようになったのは、自らも短歌を詠んだ医師内田守が九州療養所に赴任した1924年に、娯楽として患者たちが集う場として定期的に短歌会を開催したことに遡れる。(2)は、内田が編集した九州療養所の患者たちの句歌集『檜の影 第一集』が1926年に出版されたことを契機として、患者たちの短歌が療養所の外でも読むことができるようになった。決定的だったのは一九三九年の長島愛生園の明石海人の『白描』が25,000部のベストセラーになったことである。(3)は、積極的に「救癩」活動を行なった貞明皇后は、金銭的な支援だけでなく、人々に癩患者たちを手助けするように促す意味の歌を詠んだ。この「み恵」に対して、患者たちは貞明皇后に対する感謝を歌で表現した。この相互行為により、ハンセン病患者たちは「臣民」となり得たのである。

研究の成果を反映させつつ『短歌研究』2018年2月号から2021年まで連載してきた代表的「癩歌人」である明石海人についての「光を歌った歌人 - 新・明石海人」にもとづいた明石海人の短歌についての著書『天啓 - ハンセン病歌人明石海人の誕生』を、2022年12月に短歌研究社から出版した。同書の書評が「東京新聞」(2023年2月4日)、「西日本新聞」(2023年3月25日)に掲載された。また、本研究全体をまとめた『皇太后・ハンセン病・短歌』(仮題)の出版の準備を進めている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計41件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 95巻2号
2. 論文標題 「潔め」、キリスト教、公衆衛生	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 99-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20716/rsjars.95.2_99	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 78巻4号
2. 論文標題 光をうたった歌人：新・明石海人論(33)混沌の語り(3)進行する病状に向き合って	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 164-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 78巻6号
2. 論文標題 光をうたった歌人：新・明石海人論(34)死への軌跡	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 148-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 78巻7号
2. 論文標題 光をうたった歌人：新・明石海人論(35)気管切開、『白描』出版、そして死	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 166-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 第13号
2. 論文標題 感傷と「探求の語り」：明石海人『白描』の受容をめぐる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 成城大学共通教育論集	6. 最初と最後の頁 71-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川義信、中岡成文、西村高宏、池田光穂	4. 巻 31巻2号
2. 論文標題 生きるための社会デザインを考える (著者：中川義信、中岡成文、西村高宏、池田光穂、司会：山中浩司)、保健医療社会学論集、第31巻2号、Pp.9-15、2021年 doi:10.18918/jshms.31.2_9	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 9-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18918/jshms.31.2_9	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77巻4号
2. 論文標題 光を歌った歌人ー新・明石海人論24	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 134-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77巻7号
2. 論文標題 光を歌った歌人ー新・明石海人論25	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 138-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77巻8号
2. 論文標題 光を歌った歌人一新・明石海人論26	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 178-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77巻9号
2. 論文標題 光を歌った歌人一新・明石海人論27	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 250-254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77巻10号
2. 論文標題 光を歌った歌人一新・明石海人論28	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 182-186
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77巻11号
2. 論文標題 光を歌った歌人一新・明石海人論29	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 138-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 78巻1号
2. 論文標題 光を歌った歌人ー新・明石海人論30	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 156-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 78巻2号
2. 論文標題 光を歌った歌人ー新・明石海人論31	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 140-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 78巻3号
2. 論文標題 光を歌った歌人ー新・明石海人論32	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 176-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 76(4)
2. 論文標題 光をうたった歌人 新・明石海人論 14	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 100-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 76(5)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 15	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 112-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 76(6)	4. 巻 76(6)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 16	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 148-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 76(7)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 17	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 96-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 76(8)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 18	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 110-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 76 (9)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 19	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 166-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 76 (11)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 20	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 136-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77 (1)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 21	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 136-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77 (2)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 22	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 148-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77(3)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 23	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 138-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 第11号
2. 論文標題 二つのコンタクト・ゾーン：終戦までのハンセン病療養施設における短歌をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 成城大学共通教育論集	6. 最初と最後の頁 109-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 75(4)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 03	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 72-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 75(5)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 04	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 130-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 75(6)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 05	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 110-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 75(7)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 06	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 116-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 75(8)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 07	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 124-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 75(9)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 08	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 158-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 76 (10)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 09	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 142-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 76 (11)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 10	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 114-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77(1)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 11	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 156-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77(2)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 11	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 106-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 77(2)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 12	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 112-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田光穂	4. 巻 4
2. 論文標題 アートとコミュニケーション：芸術人類学へのもうひとつの入り口	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 C0*Design	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/71351	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 75(2)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 01	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 74-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡秀明	4. 巻 75(3)
2. 論文標題 光をつたった歌人 新・明石海人論 02	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 120-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田光穂	4. 巻 28(2)
2. 論文標題 病い研究とポリフォニー：ミハイル・バフチンから刺激をうけて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18918/jshms.282_11	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 松岡秀明
2. 発表標題 日本 MTL のハンセン病政策 - 自由療養区から絶対隔離へ -
3. 学会等名 第79回日本宗教学会学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中川義信・中岡成文・西村高宏・池田光穂（司会：山中浩司）
2. 発表標題 シンポジウム「生きるための社会のデザインを考える」
3. 学会等名 日本保健医療社会学会第46回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松岡秀明、池田光穂
2. 発表標題 「病いの語り」としての短歌と「植地的想像力」 第二次世界大戦の終戦までのハンセン病短歌の政治性をめぐって
3. 学会等名 第45回日本保健社会医療学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡秀明
2. 発表標題 ハンセン病とキリスト教 - コンタクトゾーンとしての日本MTL -
3. 学会等名 第78回日本宗教学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MATSUOKA Hideaki and IKEDA Mitsuho
2. 発表標題 Leprosy, Tanka (Short Poem) and Imperialism
3. 学会等名 the 60th Annual Meeting of the Korean Society of Cultural Anthropology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 IKEDA Mitsuho and MATSUOKA Hideaki
2. 発表標題 Lepers, Nation-State, and Empress Dowager: A Prolegomena to Medical Anthropology of Bio-Power Governmentality
3. 学会等名 the 60th Annual Meeting of the Korean Society of Cultural Anthropology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松岡秀明
2. 発表標題 賀川豊彦のハンセン病観 患者とその文芸に対するかかわりから」、日本宗教学会
3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松岡秀明
2. 発表標題 コンタクトゾーンとしてのハンセン病療養所長島愛生園
3. 学会等名 第43回日本保健医療社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 病い研究とポリフォニー：ミハイル・パフチンから刺激を受けて
3. 学会等名 第43回日本保健医療社会学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 池田光穂	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 270
3. 書名 『病む』山中浩司・石蔵文信編、（担当箇所「第3章病むことの多様性と治ることの斉一性」Pp.47-62）	

1. 著者名 東洋英和女学院大学死生学研究所	4. 発行年 2018年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 359
3. 書名 『死生学年報2019 死生観と看取り』（担当箇所「賀川豊彦とハンセン病文芸」 pp. 135-154）	



1. 著者名 松岡秀明	4. 発行年 2022年
2. 出版社 短歌研究社	5. 総ページ数 288
3. 書名 天啓	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>終戦までのハンセン 病患者の「臣民」化における短歌と医療の関係をめぐって  <a href="http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/Japanese_Tanka&amp;Lepers_Identities.html">http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/Japanese_Tanka&amp;Lepers_Identities.html</a>  終戦までのハンセン 病患者の「臣民」化における短歌と医療の関係をめぐって  <a href="http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/Japanese_Tanka&amp;Lepers_Identities.html">http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/Japanese_Tanka&amp;Lepers_Identities.html</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	池田 光穂  (Ikeda Mitsuho)  (40211718)	大阪大学・COデザインセンター・名誉教授    (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------